

『氷室』 2026年5月号 18句 p. 2, p. 3  
瓢鮎抄 (二〇九)

尾池和夫

紫雲英田の道や喪服の列長し  
盆栽の三百年や花馬酔木  
何か飛び立ち松の芯蹴散らして  
最古とふ葉桜や気を浴ごと  
黄門様ゆかりの庭や風薫る  
短夜や灯す家来と消す家来  
新緑の枝へ集まる麒麟かな  
鯉のぼり厚労省の屋上に

漉し餡粒餡味噌の餡柏餅  
茶摘籠通ひ慣れたる道の辺に  
凜として明日の空へ立葵  
石菖の群に湧玉池の風  
棹さすや藻にさからはず藻刈舟  
水馬の増えたる池や研究所  
草を刈る鎌もて握手してくれし  
今年竹さらに高くと竹生島  
鶴の島のむき出しジュラ紀の花崗岩  
鶴のこゑの琵琶湖へ散りし竹生島

『氷室』 2026年4月号 18句  
瓢鮎抄 (二〇八)

尾池和夫

行者橋渡る子のこゑ風光る  
しみじみと柳の芽吹き確かなる  
知恩院ここ境界の春の川  
新調のジーンズに春来たりけり  
風光る朝の烏丸丸太町  
完璧なる鶯なれば目ざめ佳き  
鶯とともに活動開始とす  
春雨や駄菓子の餡の硬きこと

サイレンの魚津やA級蜃気楼  
みつけ海岸蝶の立寄る岬なり

青空に掛川早咲き桜かな  
笠ひとつ杖一本の野遊びへ  
春の鴨集まる田道橋左岸  
新海苔の旗品川の街道に  
桜はや散り始めたる目黒川  
駅の名は「後免」地獄の釜の蓋  
容堂公の墓に酒盃や春の昼  
四万十川の青海苔あぶり朝の飯

『氷室』 2026年3月号 18句  
瓢鮎抄（二〇七）

尾池和夫

志賀越道の観音様や春兆す  
縄文の山や斜面に梅の花  
残雪や石の声聞く穴太積  
涅槃図や見渡す庭に猫のをる  
昼待てず蕎麦屋へ急ぐ雪解道  
俎板に鰭のはみ出す桜鯛  
瀬の果てに灯台のあり春の海  
堆砂垣鳴らし過ぎゆく春嵐

春一番盆地は雲の吹き溜り  
三四郎池右廻り残る鴨  
春の波の音の短き由比ヶ浜  
竹籠に蝶の舞ひ込む昼下がり  
春の日や猫が横目に猫を見る  
大椀の両手にあまる浅蜷汁  
悠揚と四国三郎しじみ汁  
渦潮へ逆に廻りし鳶の笛  
硫黄島の噴煙はるか春の海  
四百号並木ほつほつ初桜

『氷室』 2026年2月号 18句  
瓢鮎抄（二〇六）

尾池和夫

福寿草梅の老木取りまいて

内堀の波紋のままに凍りけり  
冬芽確かめ本堂に入る尼僧  
寒の雷寒の狐を照し出し  
大道のマリオネットや春隣  
赤鬼の肩に雪積む火炉の前  
葦の矢を高くへ放ち年男  
立春の登校児童豆を踏む

立春の雄鶏は時高らかに  
大皿にひろげ春節水餃子  
春節や町内会長王の役  
隧道を港へつなぐ梅の里  
蜜蜂の巣箱並びて梅畑  
梅が香や羽音谷間に満ちてをり  
般若心経一石一字臥竜梅  
早春や余震続きに犬のこゑ  
香時計の五時間単位春浅し  
潮焼の名所案内図春の雪

『氷室』 2026年1月号 18句  
瓢鮎抄（二〇五）

尾池和夫

思ひがけぬメモの置き場所冬うらら  
ひと箸ごと美味ひと言うて菓喰  
花束の深紅ひときは冬の薔薇  
参道の左に右に冬紅葉  
棒鱈の水替へ冬の日課なり  
鐘ひとつ打つたび雪のしづりけり  
天地人ゆるぐことなく去年今年  
断層の動きを計り去年今年

十六島岩海苔浮かべ雑煮椀  
冬霧のなか御神矢の祓はるる  
御神矢を掲げ冬日の男山  
荷印に「福孝」とある初荷かな  
初子の日とて野に出て何もせず  
よろしくと福笹越しのえびす顔

装束を正してかるた始式  
小豆粥炊く火の揺るる震度一  
狂言に大笑正月十九日  
わらわらと覗き数個の竜の玉